

## Ficino and prisci theologi

Shohei EDAMURA<sup>†</sup>

### Abstract

Marcilio Ficino argued that a series of ancient theologians or “prisci theologi” had been inspired by the divine wisdom and they had presented the most profound philosophy to the posterity. The succession of such theologians was the following: Zoroaster, Hermes Trismegistus, Orpheus, Aglaophemus, Pythagoras, Philolaus and Plato. According to Ficino, they all attained the divine wisdom through the natural reason given by God. This article will explicate what Ficino understood as common features of their views, and explore Ficino’s concept of prisca theologia.

### Keywords

Ficino, Renaissance philosophy, perennial philosophy, prisca theologia, neoplatonism

## フィチーノといにしへの神学者たち

枝村 祥平<sup>†</sup>

### キーワード

フィチーノ, ルネサンス哲学, 永遠の哲学, いにしへの神学, 新プラトン主義

今日, おそらくはどの国籍の人も, 以下のよう  
な問題を抱えている。つまり, 自分自身の哲  
学・思想を形成しようとすれば, 前提となりう  
る情報があまりに多く, それが凡庸で怠惰な人  
だけでなく素質に優れた勤勉な人をさえも圧倒  
する, という事実直面しているということであ  
る。思想形成にあたって関連する学問領域は  
多岐にわたっているし, 特定領域の学問には固  
有の歴史があって議論の経緯は過去に向かって

際限がないとさえ思えるくらいにその歴史を遡  
ることができる。いわゆる西洋哲学史に限って  
みても, 発想や概念の源泉としてプラトンやア  
リストテレスのテキストにまでさかのぼればひ  
とまず安心, とはいえず, 彼らからの引用に基  
づいた議論がソクラテス以前の哲学者のもの  
とされる言葉を引用することで覆されるおそれ  
もある。研究者は, 多様な温故知新の可能性に胸  
膨らませる一方で, 圧倒的な領野を前に立ちす

---

<sup>†</sup> edamura@seiryu-u.ac.jp (Liberal Arts and Sciences, Kanazawa Seiryu University)

くむのである。

このような状況において、さしあたり、次のような見通しが立つのであれば、歓喜勇躍とまではいかないまでも、その見通しに多少なりとも縋り付いて希望をもつことができる。つまり、時代を異にする西洋の哲学者たちの議論には、全員によってではないにせよ相互に共有された普遍的な内容があり、それは今日他の文明圏において哲学を志す者にとっても参照する価値がある、という想定である。アゴスティノ・ステウコ（1497/98-1548）によって提唱され、ライプニッツも重視した「永遠の哲学（*philosophia perennis*）」は、大雑把に言えばこうした想定に伴う希望に寄り添うような理念であった<sup>(1)</sup>。

この理念の先駆となるのは、マルシリオ・フィチーノ（1433-99）が示した「いにしえの神学（*prisca theologia*）」という概念である。彼はルネサンスにおいて、ヨーロッパに伝わった古代ギリシアの優れた文献を翻訳し、内容の意義をキリスト教神学との関連で問い直した代表的な人物である。フィチーノは、フィレンツェでコジモ・デ・メディチに重用され「プラトン・アカデミー」と呼ばれる一大知的サークルを形成するとともに<sup>(2)</sup>、古代ギリシアの文献の翻訳および自身の哲学の著述に多大な業績を残した<sup>(3)</sup>。そしてフィチーノは、神は選ばれた人々に対して段階的に知恵の宝庫を明るみにしてゆくことを許したと考える<sup>(4)</sup>。より具体的に言うと、ゾロアスター、ヘルメス、オルペウス、アグラオパモス、ピュタゴラス、ピロラオス、プラトンという7人の先人たちが、生まれた時代や地域の違いこそあれ、自身の理性を駆使することで、キリスト教とも整合的な、神についての深い認識を得たというのがフィチーノの理解であった。そして彼は自分こそが、先人たちの系譜をルネサンスの時代に継ぐ人物だと考えていたのである。彼が挙げた先人たちは今日からみれば、神話上の存在であったり（ヘ

ルメス、オルペウス）、その詳細が不明であったり（アグラオパモス）するが、彼が理解したところのルネサンス以降にも通用する神学（あるいは哲学と宗教の統一体）がどのようなものであったかを、彼が先人たちをどう理解したかから読み取ることはできる。そこで、本論はフィチーノが彼らの間にどのような共通点を見出したのかを精査し、フィチーノのいう「いにしえの神学」の内実をさぐる。

## 1. 「いにしえの神学者たち」

まず、フィチーノが普遍的な哲学を提示した古代の人物たち、彼の言うところの「いにしえの神学者たち（*prisci theologi*）」を列挙しているところを確認し、彼らが共有している性質がどのように語られているかについてさぐりを入れてみよう。フィチーノは主著『プラトン神学』（1482年出版）において、次のように彼らを列挙する。

いにしえの神学者たちはこれらを〔つまり、我々の知的理解は限られているが、すべて神の光に由来することを〕理解していたので、彼らは常に哲学の研究を宗教的敬虔と結び付けた。第一に、ゾロアスターの哲学は（プラトンが証言するように）叡智的な敬虔と神の崇拝に他ならない。またヘルメス・トリスメギストスの討議もみな、祈りとともにはじまり犠牲とともに終わる。オルペウスとアグラオパモスの哲学もまた、全体として、神的なものの賞讃にかかわっている。ピュタゴラスは朝に聖なる讃歌をうたって彼の哲学の研究を始める習慣があった。プラトンは、語ることににおいても思考することにおいても、一つ一つの事柄を神からはじめることを我々に教えた。そして彼自身がつねに神からはじめていたのだ。<sup>(5)</sup>

確認しておくとして、列挙されているのは順に、ゾロアスター、ヘルメス、オルペウス、アグラオパモス、ピュタゴラス、プラトンの6人である。フィチーノによれば、この6人は細部においての差異はあるとはいえ、もっとも正統的な神学思想を継承し人類に伝えたのである。そしてフィチーノによれば、正統的な神学思想の系譜はこの6人のもののみであり、これとは独立した別の正統的な神学の系譜があるわけではない。とはいえ、6人の出自は多様である。ゾロアスターはペルシア地域の生まれと考えられている一方、ヘルメスはエジプトで活躍したと信じられている。そして、オルペウス以降の人物はみなギリシア文明圏に所属していると考えられている。フィチーノが、いにしへの神学が地域を超え受け継がれたと考えていたことがみてとれる<sup>(6)</sup>。

そしてフィチーノは、彼ら6人の神学が、彼の生きる現在、ルネサンスの時代においても大きな意味をもつという。ルネサンスの時代であれ、その先の時代であれ、もっとも優れた哲学をもとめるのであれば、フィチーノが示したところの正統的な系譜にある人物がもっていた知恵について精査し、彼らが残したテキストから真意を汲み取らなければならないのである<sup>(7)</sup>。

なおフィチーノは、『プラトン神学』以前に出版された、『ヘルメス選集』の自身によるラテン語訳、『ピマンデル、あるいは神の力能と叡智について』(*Pimander, seu De potestate et sapientia Dei*, 1471年出版)の序文では、次のように書いている。

[ヘルメス・トリスメギストスは]、哲学者たちの間で、自然的なものや数学的なものから神的なものの観想へ向かった最初の者である。神の威厳、諸霊(ダイモン)の位階、諸々の魂の変容について、極めて叡智的に論じた最初の者である。それゆえに、彼は神学の最初の創案者と呼ばれた。

続くオルペウスは、古き神学の第二の地位を得た。アグラオパモスは、オルペウスの秘儀を伝授された。ピュタゴラスは神学においてアグラオパモスに続き、そのピュタゴラスに従ったピロラオスが、神のごとき、われわれのプラトンの師である。従って、6人の神学者からなる驚くべきならば(ordō)から、いたるところで調和している一つの「いにしへの神学」がうまれた。それは、ヘルメスによって始められ、神のごときプラトンによってすみずみまで完成させられたのである。<sup>(8)</sup>

ここではゾロアスターの名前が挙げられず、かわりにプラトンの師としてピロラオスが挙げられている。フィチーノがいにしへの神学者たちのリストを修正した理由は定かではないが、おそらく上の箇所を書いた後にフィチーノがゾロアスターの重要性に気付いたのではないかと。ともあれ本論ではさしあたり、『プラトン神学』に挙げられた6人にピロラオスを加えた7人が、フィチーノによってどのように捉えられているかをみてみることにしたい。

## 2. ゾロアスター

ゾロアスター(アヴェスタ語ではザラトシュトラ)は今日でもアフラ・マズダ神を崇拝する極めて長い歴史をもった宗教、ゾロアスター教の始祖として知られているが、その生没年を確定することはできないようである。おそらく、紀元前10世紀から6世紀の間にイランで生まれた彼は、ゾロアスター教の聖典『アヴェスタ』によればアフラ・マズダ神の啓示を受け、正義に目覚めるべきこと、動物の生贄や虐待をやめることなどを人々に勧め、イラン東部のウィーシュタースパ王<sup>(9)</sup>の帰依を得るに至ったという。ゾロアスターは後に、ギリシア・ラテン時代の学者からマグスたち(マジ)の教祖として認識された<sup>(10)</sup>。マグス(magus)とは、

メディア王国で儀礼を担っていた氏族に属する者をさすラテン語である。彼らの行う秘儀的な儀礼は魔術としての効果があったともされ、その名は「魔術 (magia)」、「魔術的 (magus, magicus)」といった言葉の語源にもなっている<sup>(11)</sup>。フィチーノもゾロアスターを、神についての優れた認識を得た人物としてだけでなく、自然的魔術の祖としても理解していたようであり、主として『カルデア神託』に基づいてゾロアスターの神学を解釈している。『カルデア神託』は、2世紀に成立した宗教的テキストであり、後に新プラトン主義者たちはこれによる啓示だとみなしたが<sup>(12)</sup>、フィチーノはこのテキストが2世紀よりもっと前にゾロアスターによってもたらされたと考えた<sup>(13)</sup>。

では、フィチーノが理解したところのゾロアスターの神学をまとめよう。ゾロアスターは唯一の神が「父なる精神」<sup>(14)</sup>、「父なる原理」であり、いかなる不完全なものも神ないし「父なる原理」からでて出ることはないともいう<sup>(15)</sup>。従ってゾロアスターによれば複数の神々について語っているものは、真の神を知らないか、あるいは真の神から派生した明らかに下位の存在について語っているにすぎないのだ。ゾロアスターはまた神を「父」と称することで<sup>(16)</sup>、三位一体における一つの位格を暗示している。

宇宙は、知性に由来する秩序をももつ。人間より上位の存在である天使もまた、神の統治のもとにあり、天使もまた神の光によって知的認識をする<sup>(17)</sup>。宇宙にはいたるところに動いているものがあり運動に満ちているが、自分自身は運動しないところの、知性をもった「統治者たち (rectores)」つまり神に生み出された天使たちによっておさめられているのである<sup>(18)</sup>。

神によって生み出された個別的な魂は、他のものを知る能力を備えている。特に天使は、生み出された他のすべてのものを知ることで、ある意味では他のすべてのものを内にもつことになる<sup>(19)</sup>。人間の魂にも、知的認識に関

わる「花 (flos)」あるいは「中心 (centrum)」があり、それは魂のもっとも重要なところである<sup>(20)</sup>。

また個別的な魂は、それ自体として不死でもある<sup>(21)</sup>。個人の魂は、生物学的な死を迎えることで、消えてしまうわけでもなく、またより大きな全体へと吸収されるわけでもなく、むしろそれ自体として存続していくのである。さらにゾロアスターは身体もまた滅びないという想定をしており、後にキリスト教徒が明示するような、神の力による人間の身体の復活まで考えていたとされる<sup>(22)</sup>。

ゾロアスターは、神を愛し神に向かっていこうとする人間の行いを祝福する。そして、プラトンの『国家』にも示されているように、まぶしくても神に由来する「光」そのものに目を向けることで、魂が真の意味で満たされるのだと考えていたのだという<sup>(23)</sup>。一方ゾロアスターは、魂を墮落させることを戒めてもいる<sup>(24)</sup>。例えば、身体に由来する過度の欲望に身を委ねることは魂の墮落につながる<sup>(25)</sup>。

そしてフィチーノはゾロアスターが20年もの間孤独に身を置いて思索し、以上の真理を会得するにいたったと述べている<sup>(26)</sup>。

### 3. ヘルメス・トリスメギストス

「ヘルメス」は今日、もっぱらオリンポス12神の一人、ゼウスの息子であるトリックスターの伝令神の名前として知られている。ヘルメスはエジプトにおいては、鳥の姿をした智慧の神トトと同一視された。こうしてトトと習合したヘルメス・トトは、ときにヘルメス・トリスメギストス（三倍偉大なヘルメス）という別名で呼ばれ、「エジプトのヘレニズム・ローマ文化圏」の学問神とみなされるに至った<sup>(27)</sup>。そしてこの地域で生まれた匿名のテキストは後に『ヘルメス文書』と呼ばれ、ヘルメス・トリスメギストスが書いたと信じられるようになった。そうして、ルネサンスの時代においては、

彼は神であるというよりもむしろ、前キリスト教的な時代における傑出した人物、預言者として受け取られるようになった<sup>(28)</sup>。

フィチーノの理解によれば、ヘルメスはおおむね次のような神学をもっていた。すなわち、唯一の神が存在し、それは知性的な存在でもある。すべての形相は神に由来する。世界は、全ての形相をもつ神の、全ての形相を駆使して表現される似姿である<sup>(29)</sup>。神はまた意志をもっている。世界におけるいかなるものも神の意志なしには生まれないので、神の意志はすべてのはじまりである<sup>(30)</sup>。さらにヘルメスは、神が力、知恵、善性という三つの基本的な性質をもっていると認識しており、三位一体をすら暗示した<sup>(31)</sup>。

ヘルメスは神の摂理をも認識していた。すなわち彼によれば、知性をともなった神の意志によって、宇宙は秩序付けられたようになる。宇宙の部分が醜くみえたとしても、その醜い部分ですら神の摂理のもとにあり、その部分は全体に貢献するようにできている<sup>(32)</sup>。そして、摂理をもって創造された宇宙には時間的なはじまりがある<sup>(33)</sup>。さらにヘルメスは星の運行に周期があることなどから読み取れる宇宙の円環的な変化や、円環的な変化の区切りについても示唆している<sup>(34)</sup>。

さらにヘルメスは人間存在は大いなる奇蹟で、動物にとっては人間は敬い拝むべきものでさえあるという<sup>(35)</sup>。またヘルメスは人間の身体が保存され復活する可能性についても示唆しており、例えば自分の息子であるタートの復活について語っていたようだ<sup>(36)</sup>。一方ヘルメスは人間の魂が墮落していく場合についても論じている。例えば、魂は悪い霊(ダイモーン)に導かれることもある<sup>(37)</sup>。

最後に付け加えると、ヘルメスもゾロアスターと同様、孤独な思索に長年身を置くことによって、真の神学に思い至り、いにしえの神学者に列せられるようになったと考えられている<sup>(38)</sup>。

#### 4. オルペウス

オルペウスは今日、ギリシア神話上の人物として知られている。アポロドロス著とされた『ギリシア神話 (*Bibliothēkē*)』によるとオルペウスは、ある説では女神カリオペとトラキア王オイアグロスの子として、別の説ではアロン神の子として生まれた<sup>(39)</sup>。彼は豎琴の名手であったが、あるとき不運にも恋人エウリュディケを亡くしてしまった。悲嘆にくれ、彼はついに、冥府にいる彼女に会い、冥府の主神ハデスの許可を得て彼女をこの世に連れ戻すことを決意する。オルペウスは自慢の豎琴でハデスの歓心を買ひ、条件つきで彼女をこの世に連れ戻すことを許された。彼女の手を引いて、決して彼女の顔を振り向いてみることなく地上まで戻ることができれば、無事連れ戻すことを許すというのだ。オルペウスは言われた通りに手を引くが、地上近くでついに歓喜のあまり彼女に振り向いてしまう。エウリュディケはそこで石となってかたまってしまう。古代ギリシアに栄えたいわゆる「オルペウス教」は、このオルペウスを始祖と仰ぎ、(今日では多くが散逸したが) 経典を有していた点で同時期の宗教と一線を画するという<sup>(40)</sup>。ルネサンスの時代においても、オルペウスはこの宗教の始祖とされ、またこの秘儀的宗教の讃歌をつくった人物とも考えられていた<sup>(41)</sup>。フィチーノもまた、主として讃歌に基づいてオルペウスの神学を解釈している<sup>(42)</sup>。

では、オルペウスの神学はどのようなものであったのか。フィチーノによれば、オルペウスも神の存在を信じていた。フィチーノによると、オルペウスは神を「必然性」、「すべてを支配する強い必然性」だと考えている<sup>(43)</sup>。これは神が、単純な実体で、また自分自身によって必然的に存続するからに他ならない。オルペウスはいくつもの神について語ってはいたが、それでも彼は別々の名前前で示されるすべての霊を一なる神のうちにみていたのであり、究極

的には唯一の神を信じていたのである<sup>(44)</sup>。彼にとって神は「無限なる終点 (infinitus finis)」であり<sup>(45)</sup>、光を後ろに隠し、かつ時に応じて照射する者である<sup>(46)</sup>。

またオルペウスはゼウスについて語るとともに、父神ゼウスから生まれたとされる女神パラス・アテナについても語っているが、フィチーノによればオルペウスは実質的には唯一なる神の父性と子性について語っている、ということになる<sup>(47)</sup>。

また神は全知であり、個々の対象をすべてくまなく認識している。だからこそオルペウスは「ユピテルの目は完全である、というのもすべてはわれわれにとって運命として起こり、ユピテルの精神は宇宙すべてにゆきわたる」というのである<sup>(48)</sup>。神はすべてに対して圧倒的に優越しており、なにももの神の決定にあらがうことはできない<sup>(49)</sup>。神はあらゆるところに偏在し、どんなものの生成をもつかさどる「君主」である<sup>(50)</sup>。宇宙ないし世界はあるときに神によって創造されたので、時間的なはじまりをもつ<sup>(51)</sup>。そしてオルペウスは、時間に沿った世界の変化を、変身を得意とするギリシア神話の神プロテウスとむすびつけて語るのである<sup>(52)</sup>。

神は摂理をもって宇宙の諸事物を創造する。それゆえに、創造物全体は善であり、どの部分もおろそかにされておらず全体に貢献する<sup>(53)</sup>。ただ一方で、悪しき被造物に対して神はふさわしい罰をも与える<sup>(54)</sup>。世界のなかの「低い」ところ一つまり冥界ないし地獄一における永遠の罰、そして罰による魂の消滅をオルペウスは認めている。

オルペウスは、人間の魂が神を称えることを勧める<sup>(55)</sup>。そうしてこそ、魂はよく地上の雑多なものから自由になって、神へと向けられるのである<sup>(56)</sup>。オルペウスはさらに愛の概念を強調し<sup>(57)</sup>、愛によって人間の精神は翼をもつ、という。一方オルペウスは、嫉妬深い野心をもつ悪霊が魂を墮落させる可能性も示唆するが、

悪霊の影響は哲学や犠牲によって乗り越えられるともいう<sup>(58)</sup>。オルペウスは悪しき気質をもつ魂が冥府に行かなければならないことも示唆している<sup>(59)</sup>。

## 5. アグラオパモス

アグラオパモスは今日詳細不詳の人物である。プロクロスの著作『プラトン神学について』によると、彼は神々に捧げる酒宴についてピュタゴラスに教えた人物とされているが、その扱いは大きくない<sup>(60)</sup>。フィチーノにおいても、「いにしへの神学者たち」の中に列せられているとはいえ、アグラオパモスの扱いはオルペウスとピュタゴラスの「中継ぎ」という印象を否めない。『プラトン神学』における数少ない言及箇所に基づくと、フィチーノは次のように彼を理解していた。すなわち、アグラオパモスはオルペウスの教えを受け継ぎ、オルペウスの秘儀を始めた人物とされている<sup>(61)</sup>。その哲学は、オルペウスのもと同様に、もっぱら神的なものを称えることに関わるとされている<sup>(62)</sup>。

## 6. ピュタゴラス

ピュタゴラスは今日、紀元前6世紀にサモス島に生まれた哲学者として知られている。様々な地で見聞を広めたのち、南イタリアのクロトンで新しい教団・学校を開き、一大勢力となったと伝えられる。彼は魂が不死であり、かつ輪廻転生をすると教えていたされ、プラトンはシシリア島に渡ったときにピュタゴラス派の思想の影響を受けたともされる。フィチーノもまた、プラトンが有していた重要な教説の先駆者としてピュタゴラスを理解するのである<sup>(63)</sup>。

フィチーノが理解したところのピュタゴラスの神学に移ろう。ピュタゴラスは神が一であると信じている。ピュタゴラスはアポロについて語源論的分析をし、彼の名前を *ἀπλοῦν* (単純) あるいは *ἀ-πολλῶν* (多から切り離された) を意味すると解釈しているとされ、フィチーノはこ

れをピュタゴラスが神を一で単純であると理解した証だと考える<sup>(64)</sup>。さらにピュタゴラスは数の分析にもたけており、一性 (unitas) と対 (duitas) という、父的と母的な二つの数の原理をあきらかにした<sup>(65)</sup>。ピュタゴラスは多くのものが一つの調和にあることによって、それらが統一性をもちいわば全体として一であることを示唆した<sup>(66)</sup>。だから、神から生まれたさまざまな存在者が互いに調和的な関係をもつことで、宇宙が全体としての統一性をもつのである。そしてフィチーノは、例えば宇宙の諸事物が形作るような統一性は善へむいており、これに対し単なるバラバラの多様性が悪へとむかっていることを示唆している<sup>(67)</sup>。

魂が不死でありそれが生まれる時点も消滅する時点ももたないことは、球になんらの開始点も終着点もないことに喩えられている<sup>(68)</sup>。またピュタゴラスは、魂がいずれ身体をはなれていくとし、その後の輪廻転生をシンボルをもちいて示そうとした<sup>(69)</sup>。魂は良心をもち、それはいわば内面化した神の目である<sup>(70)</sup>。さらに魂には、聖なる自然によって与えられた一種の生得的な知識があり、それを駆使することですべてを明らかにすることさえもできるという<sup>(71)</sup>。

ピュタゴラスも先人たちと同様に、孤独に身をおいて以上の真理を会得したという<sup>(72)</sup>。

## 7. ピロラオス

ピロラオスは紀元前420年ごろに活動した南イタリア生まれのピュタゴラス派の人物で、数、天体、魂と身体の関係などについての哲学的考察を深めたという<sup>(73)</sup>。

フィチーノはピロラオスを、もっぱらプラトンの師として重視している。フィチーノはアルキタス、エウリトウス、ピロラオスの三人を、プラトンにピュタゴラス的な知恵を伝えた三人の師としている<sup>(74)</sup>。ピロラオスはピュタゴラス派のならわしに従い、神を一性と呼んだ<sup>(75)</sup>。そして延長している物質を二性 (dualitas) と

呼んだ。二性は数のはじめての分割であり、物質の広がり互いに区別されるような形相が生ずる最初の場所の原因である。またピュタゴラス派の伝えるところによると、ピュタゴラス、エンペドクレスとともに、ピロラオスも奇蹟をおこしていた、という<sup>(76)</sup>。

## 8. プラトン

フィチーノにとってプラトンは「神のごときプラトン (divinus Plato)」であり、いにしへの神学がそこにおいて総合され、最高度の発展をみた大哲学者であった。フィチーノの著『プラトン神学』は、今日フィチーノ独自の哲学体系を示すものとみなされているが、フィチーノにとってはプラトンの神学をルネサンスの時代の人々にとってより明確で伝わりやすい仕方で叙述したものである<sup>(77)</sup>。従って、フィチーノがプラトンをどう解釈したかをくまなく述べようとすると、フィチーノの壮大な仕事のほぼすべてを網羅することにもなってしまうであろう。そこで本論では、先に紹介した6人の人物についての解釈を前提として、フィチーノが彼らとプラトンにどのような共通点があると考えたかを模索する目的で、フィチーノが理解したプラトンの思想を簡潔に紹介するにとどめる。

フィチーノによれば、プラトンは、絶対的一性、真、善が天使をも凌駕する普遍的原理であること、そして唯一の真で善なる神が存在することを見抜いていた<sup>(78)</sup>。『ピレポス』では、神はすべての事物の限界 (terminus) であるとされている<sup>(79)</sup>。一それ自体は本質を超えている<sup>(80)</sup>。神はイデアの源泉であるが<sup>(81)</sup>、一なる神自体はイデアをも超えたレベルにあり、そこにおいてはイデア相互の区別もまた存在しない<sup>(82)</sup>。

プラトンはまた、『ティマイオス』『パイドン』『ピレポス』『政治家』で、自然的諸事物の原因が偶然であるという考えを否定しており<sup>(83)</sup>、諸事物は摂理によって関係づけられて生じるの

でなければならないとしている。特に『ティマイオス』では、イデア、範型、独立な理性的原理によって、世界の作者が世界をつくったとされている<sup>(84)</sup>。神は形相的な力を混沌に与えたのだ<sup>(85)</sup>。世界は美なるものとして、最善のものとしてつくられている<sup>(86)</sup>。神の善意は諸事物のもっとも確かな起源である<sup>(87)</sup>。また『ティマイオス』では、神の意志がすべての被造物のはじめであるとされている<sup>(88)</sup>。神はすべてを善を目的としてなしている<sup>(89)</sup>。時間や空間ですら、神によってはじまる<sup>(90)</sup>。

プラトンは、魂が動かすものであり、身体が動かされるものだということを理解していた<sup>(91)</sup>。魂は自由であり、自分自身で動くものである<sup>(92)</sup>。そして人間だけでなく星もまた魂をもち、天体の運動は天体がもつ魂の力によって説明されている<sup>(93)</sup>。プラトンはまた『ティマイオス』で、魂と身体・物体の区別がくわしく論じ、魂の座 (sedes) であるところの本質は物体からは生じ得ないとされている<sup>(94)</sup>。さらに、人間の魂を含めた理性的な魂は、純粋にデミウルゴス神に由来する<sup>(95)</sup>。そして、理性的な魂が観想するとき、真理の光が理性的魂に突然きらめく、という<sup>(96)</sup>。物質が自然的な形相をうけいれるように、人間の精神は神的な形相をうけいれるのである<sup>(97)</sup>。その結果、理性的な魂だけが神を知り、神に焦がれるようになる。そして、神を自分たちの作者であるとともに、自分たちの父、王、主でもあると思うようになる<sup>(98)</sup>。

プラトンは人間の魂が自由であることも強調する。そして、摂理でさえ、我々がもつ選択の自由を損なうわけではないということも、プラトンは考えていた<sup>(99)</sup>。また魂はなるほど霊(ダイモン)からの影響を受けるが、一方的にコントロールされているわけではない。『国家』第十卷では、魂が自発的に自分が従うべきダイモンを選ぶとされ、魂は決してダイモンの奴隷ではない、とある<sup>(100)</sup>。

『パイドン』によれば、魂が神的なものに向かいそれに近づけば近づくほど、魂は輝きそして喜びを得ることになる<sup>(101)</sup>。『饗宴』では、理性的な魂は神的美を愛するものであり、神的な原理をえれば諸事物の似姿ではなく真なる諸事物に従ってゆく、とされる<sup>(102)</sup>。『プロタゴラス』によると、人間は言葉を集まって話す前にすら、神にこがれているという<sup>(103)</sup>。『ティマイオス』では、神学者たちは神の子供たちであるとさえいわれる<sup>(104)</sup>。一方プラトンは魂が墮落し劣悪になる過程についても考えている。『国家』第七卷の洞窟の比喩をみると、魂が洞窟の中で影のみをみており、さらに感覚、身体に由来するさまざまな病におちこむことが示唆されている<sup>(105)</sup>。そしてわれわれは自分自身の罪についての罰をうける、とプラトンは考えていた<sup>(106)</sup>。

プラトンもまた先人たちと同様、以上の諸真理を孤独な瞑想によって得たとされる<sup>(107)</sup>。

## 9. いにしえの神学者たちが共有する根本思想とは

ではフィチーノが考えたところの、7人に共通する根本思想とは何であろうか。7人についてのフィチーノの理解を踏まえて、あらためてその共通項を振り返らなければならないが、アグラオパモス、ピロラオスについては、彼らの中継ぎ的な性格から、詳述はされていないことも考慮しなければならない。さしあたり、ゾロアスター、ヘルメス、オルペウス、ピュタゴラス、プラトンの5人について私が読み取った限りでは、フィチーノは彼らに次のような共有された思想を見出していた。

① 唯一の神の存在と、その一性の強調 彼らはすべて、厳密にはただ一人の神のみが存在すると考えた。

② 神が摂理をもって宇宙を創造したこと 神は知性と意志を駆使し、宇宙を創造した。神は単に盲目的に宇宙を創造したわけではなく、そのうちには摂理が働いている。



③ 三位一体の暗示 父, 子, 聖霊が唯一の神の三つの位格であるという教えは長らくキリスト教の根幹をなしているが, ゴロアスターは早くに神の父性を強調したし, オルベウスは父性と子性について語り, ヘルメスとプラトンは唯一の神がもつ三つの位格に実質的に気づいていた<sup>(108)</sup>。

④ 魂の不死 個々の人間の魂は不死であり, 身体が破壊されても個的なものとして存続する。魂は身体とは本質的に異なり, 区別されている。

⑤ 人間の尊厳 人間の魂は, 宗教をもつことができるなど<sup>(109)</sup>, 動物の魂にはないもろもろの特質を備えており, それが人間の尊厳をなしている。

⑥ 神へ向かうことによる, 人間の救済 人間はふとしたことで墮落してしまうが, 一方で敬虔に神に向かうことで, 墮落から回復し, 神に近づくことさえできる。秘儀による奇蹟, 自然的魔術, 音楽による癒しなどは, 魂が神に向かうことを助けうる。

⑦ 人間よりも上位の天使あるいは霊(ダイモーン)の存在 神より下位であるが人間よりも上位である存在が認められており, 人間を導いたり, ときに墮落させたりする。ただ彼らよりも下位であるからといって, 人間の尊厳が失われるわけではない。

最後に「いにしへの神学」の今日的意義について少し論じる。20世紀以降の哲学者たちがしばしば神論を哲学の本質的な部分とすることを避けてきたこと, さらに魂の不死を強調することはほとんどの場合慎まれたことを考えると, 彼の思想が古色蒼然としているという印象をもつ人もいるかもしれない。また魔術の強調は, デカルトやライプニッツなどの近代哲学とは相容れず, この点でも古さが際立つように思えるかもしれない。ただ, 一者たる神は存在などのカテゴリーをも超越する, というフィチーノ思想は, カトリックの伝統的な神学を乗り越えようとした20世紀以降の思索とも通底するのではないか。また少なくとも, 神秘的な恍惚のうちに, 魂が一種の超越を経験し, 現象的な時間の流れを超え出るといふ思想そのものは, 現象学的な観点からみても, 何らの説得力もないものではない。加えて彼の思想が, 西洋哲学と中国哲学が共有する地平を模索するライプニッツのプロジェクト, さらにそれらとインド哲学に共通する神観を模索するオルダス・ハクスレー, ジョン・ヒックなどの試みにもつながっていることにも注目すべきである。諸地域の学問的交流が盛んになり, それらにおける古典が各国語に翻訳され, 比較思想・哲学が意義をもつ今日において, フィチーノの先駆的な仕事もまた見直されてしかるべきではないだろうか。

## 注

- (1) Schmitt, 1966参照
- (2) 「プラトン・アカデミー」の詳細については, Field, 1988及びシャステル, 2002 序論を参照。
- (3) Celenza, 2017参照
- (4) Celenza, 2006, p. 102.
- (5) “Cum haec theologi prisci cognoscerent, philosophiae stadium semper cum religiosa pietate iunxerunt. Principio Zoroastris philosophia (ut testator Plato) nihil erat aliud quam sapiens pietas cultusque divinus. Mercurii quoque Trismegisti disputationes omnes a votis incipient et in sacrificia desinunt. Orphei etiam Aglaophemique philosophia in divinis laudibus tota versatur. Pythagoras a matutino hymnorum sacrorum cantu philosophiae studia incohabitavit. Plato non in dicendo solum, sed etiam in cogitando exordiri a deo praecipiebat in singulis atque ipse semper exordiebatur a deo.” (TP 12.1.14) Marsilio Ficino, *Platonic Theology* vol. 4 Cambridge: Harvard University Press, 2004, p. 25におけるマイケル・アレンの英訳を参

照した。

- (6) K.H. ダネンフェルトによると、フィチーノはゾロアスター由来のペルシアの哲学やヘルメス由来のエジプトの哲学がギリシア人に受け渡された様は、あたかも彼らが「神の摂理」に導かれているかのようである、と考えていた (Dannenfeldt, 1952, pp. 438-439)。
- (7) C. B. シュミットは、フィチーノが、もっとも優れた知恵を求めるものがみな (いにしへの神学者たちがそうしたように) 「永遠の泉」から水を汲み取って飲まなければならない、と書いていたことに触れている。O 2. 1945 Schmitt, 1966, p. 511参照。
- (8) "Hic inter philosophos primus: a physicis, ac mathematicis ad divinorum contemplationem se contulit. Primus de maiestate dei: daemonum ordine: animarum mutationibus sapientissime disputavit. Primus igitur theologiae appellatus est autor: cum sequutus Orpheus secundas antique theologiae partes obtinuit. Orphei secriis initiatus est Aglaophemus. Aglaophemo successit in theologia Pythagoras quem Philolaus sectatus est diui Platonis nostril praeceptor. Itaque una priscae theologiae undique sibi consona secta ex theologies sex: miro quodam ordine conflate est exordia sumens a mercurio: a diuo Platone pentitus absoluta." O 2. 1836 Copenhaver and Schmitt, 1992, p. 147の英訳、伊藤, 2015, p. 43 における和訳を参照した。
- (9) このウィーシュターシュパ王については、アカイメネス朝ペルシアの王であり、ダレイオス一世の父にあたる同名の人物をさすのか、別の時代の王をさすのかが不明であるらしい。ほるぶ出版『世界伝記大事典』ゾロアスターの項参照
- (10) ほるぶ出版『世界伝記大事典』ゾロアスターの項参照 実際のところは、ゾロアスターはマギの伝統とは無関係であったが、マギのちにゾロアスター教の伝道を始めたという。青土社『世界宗教事典』マギの項参照。
- (11) 平凡社『世界宗教大事典』マギの項参照
- (12) Emilsson, 2015参照。
- (13) モシェ・イデルによれば、フィチーノはプレトンにならって、ゾロアスターを『カルデア神託』の著者だと考えたようだ (Idel, 2001, p. 150)。
- (14) TP 11.3.9
- (15) TP 14.5.7
- (16) Cf. TP 3.1.12, 10.8.4 なおフィチーノがゾロアスターの思想を表現していると受け取った『カルデア神託』では、すべてを三つに分割する、など三という数を特別視する思想が強調されており、ここにフィチーノが三位一体そのものを読み取ったことも驚くにあたらない。
- (17) TP 3.1.8
- (18) TP 1.5.9
- (19) TP 4.2.4
- (20) TP 13.5.3
- (21) TP 5.14.4
- (22) DDN 1.17
- (23) TP 10.8.4
- (24) TP 18.4.3
- (25) TP 18.4.4
- (26) TP 13.2.2, 13.2.35
- (27) 岩波書店『哲学・思想事典』ヘルメス・トリスメギストスの項
- (28) クレメント・サラマンによると、フィチーノのパトロンであるコジモは、フィチーノのプラトン翻訳を一時中断させてでも、『ヘルメス文書』をフィチーノに翻訳させようとした。それほどこの文書を重視していたのである (Salaman, 2002, p. 136)。フィチーノ自身はというと、ヘルメスがギリシア哲学の源泉であるのみならず、モーセの知識をも伝えていると考えた (Salaman, 2002, p. 116)。
- (29) TP 11.4.14
- (30) TP 2.11.15, 18.1.7
- (31) O 1.612, 987, 991; Copenhaver, 1993, p. 171参照。
- (32) TP 2.13.19
- (33) TP 17.4.6, 18.2.14
- (34) TP 4.2.5
- (35) TP 14.3.2 ラウリ・オッケンシュトロムによれば、フィチーノはヘルメスの思想に従い、人間は物質を形作ることでいわば神的な (工作神デミウルゴス的な) はたらきをすると考えていたようだ (Ockenström, 2013, p. 45)。
- (36) TP 13.4.16, 17.3.5
- (37) TP 18.10.3, 18.10.14

- (38) DMT 4
- (39) B 1.3.2
- (40) 岩波書店『哲学・思想事典』ディオニュソス・オルペウス教の項参照 人間の善悪両面の起源, 魂と身体の関係についての考察がオルペウス教の宗教思想に含まれているとのことである。
- (41) リアナ・チェイニーは, フィチーノが, オルペウスが詩的狂気 (*furor poeticus*) をもった天才詩人であり, だからこそ讃歌を創作できたと考えたとしている (Cheney, 2007, p. 200)。
- (42) フィチーノが依拠した讃歌の詳細については, Klutstein, 1987参照。
- (43) TP 2.7.3
- (44) ACP 10.12
- (45) TP 2.4.4
- (46) DDN 1.13
- (47) TP 11.4.13
- (48) "Iovis perfectus oculus, quoniam quaecumque apud nos fiunt, fatum Iovisque mens per universum inspicit omnia" TP 2.9.6 Cf. O 1.327
- (49) TP 2.13.4
- (50) TP 2.6.4
- (51) TP 18.1.7
- (52) TP 4.2.5
- (53) TP 2.13.9
- (54) TP 17.4.10
- (55) TP 12.1.14
- (56) TP 13.2.37
- (57) O 1.109
- (58) TP 16.7.18
- (59) TP 18.10.11
- (60) PT 5
- (61) TP 17.1.2
- (62) TP 12.1.14
- (63) C. S. セレンザによると, フィチーノはピュタゴラスが魂の不死とオルペウスの預言をプラトンに伝えた人物だと理解していた (Celenza, 1999, p. 676)。またフィチーノのピュタゴラス理解はイアンブリコス的な新プラトン主義の影響を受けているという特徴があるという (*ibid*, 668)。
- (64) TP 4.1.16
- (65) AP 95ダニエル・ギャラガーは, 『プラトン神学』において, ピュタゴラスが宇宙の数による説明を最初に提示した人物とされているという (Gallagher, 2006, p. 104)。
- (66) DDN 1.61
- (67) O 1.735 Celenza, 1999, p. 677参照。
- (68) TP 5.2.4 フィチーノは, ピュタゴラスが魂はエーテルから生まれ, それゆえにエーテルに恋焦がれているとしていることに触れている。TP 18.8.1参照。
- (69) TP 17.4.1 フィチーノは, プラトンが『プロタゴラス』で多くの事柄を少しの言葉でもって表現するのが賢者の特性であるといっていることに言及する (Celenza, 1999, p. 693; O 2.1049-50)。そしてだからこそ, ピュタゴラスはシンボルをつくったというのである。
- (70) TP 14.8.2
- (71) TP 11.5.3
- (72) TP 13.2.2, 13.2.34
- (73) 平凡社『哲学事典』ピロラオスの項参照 なお, 地動説の項によると, ピロラオスは地動説の先駆者でもあった。
- (74) TP 17.4.4
- (75) TP 17.2.11
- (76) TP 13.4.10
- (77) とはいえシュミットは, フィチーノは「保留付きで」プラトニストと呼ばれるにすぎず, 彼の哲学には新プラトン主義の諸哲学に加え, アリストテレス的スコラ哲学他さまざまなものが流れ込んでいる, としている (Schmitt, 1966, p. 507)。
- (78) TP 2.1.4
- (79) TP 3.1.7
- (80) TP 15.19.3

- (81) TP 12.3.4
- (82) フィチーノはこの点に関して、プラトンが書簡で神秘的な神秘は言葉によって伝えられない、と書いていることに触れている。TP 12.1.10参照。
- (83) TP 2.11.11
- (84) TP 5.13.13
- (85) TP 10.7.2
- (86) TP 11.4.14
- (87) TP 18.1.7
- (88) TP 2.11.15
- (89) TP 2.13.2
- (90) TP 18.1.9
- (91) TP 3.1.13
- (92) TP 9.4.19, 9.5.15
- (93) TP 4.2.1
- (94) TP 5.5.5
- (95) TP 10.7.3
- (96) TP 8.3.5
- (97) TP 12.4.8
- (98) TP 14.8.3
- (99) TP 2.13.10
- (100) TP 13.2.17
- (101) TP 10.3.8
- (102) TP 12.2.2
- (103) TP 14.10.10
- (104) TP 13.4.12
- (105) TP 6.2.15
- (106) TP 14.10.18
- (107) TP 13.2.2
- (108) 伊藤博明はさらにフィチーノの著作『キリスト教について』を引きながら、フィチーノがいにしえの神学者たちがみな「神の子の誕生」を信じていたと考えた、とする（伊藤, 2015, p. 44）。
- (109) O 1.474 Unger, 1995, p. 9 参照。

#### 略号：

ACP = Marcilio Ficino, *Argumentum et commentaria Marcilii Ficini in Phaedrum*, Cited by chapter and section.

AP = Marcilio Ficino, *Argumentum Marselii Ficini Florentini in Parmenidem*, Cited by chapter.

B = *Βιβλιοθήκη*, Cited by book, chapter and section.

DDN = Marcilio Ficino, *De Divinis Nominibus*, Cited by part and chapter.

DMT = Marcilio Ficino, *De Mystica Theologia*, Cited by chapter.

O = Marcilio Ficino, *Opera Omnia*. Cited by volume and page.

PT = Próklos, *Περὶ τῆς κατὰ Πλάτωνα θεολογίας*, Cited by chapter.

TP = Marcilio Ficino, *Theologia platonica*, Cited by book, chapter and section.

## 文献

- Celenza, C. S. (1999) "Pythagoras in the Renaissance: The Case of Marsilio Ficino," *Renaissance Quarterly* 52: 667-711.
- (2006). *The Lost Italian Renaissance: Humanists, Historians, and Latin's Legacy*. Baltimore, MD: John Hopkins University Press.
- (2017). "Marsilio Ficino," *Stanford Encyclopedia of Philosophy*.
- Cheney, L. D. G. (2007). *Giorgio Vasari's Teachers*. London: Peter Lang.
- Copenhaver, B. P. (1993). "Hermes theologus" In John W O'Malley, Thomas M. Izbicki and Gerald Christianson (Eds.), *Humanity and Divinity in Renaissance and Reformation* (pp. 149-82). Leiden: Brill.
- Copenhaver, B. P. and C.B. Schmitt (1992). *Renaissance Philosophy*. New York, NY: Oxford University Press.
- Dannenfeldt, K. H. (1952). "The Renaissance and the Pre-Classical Civilizations," *Journal of the History of Philosophy* 8 : 435-449.
- Emilsson, E. K. (2015). "Porphyry" *Stanford Encyclopedia of Philosophy*.
- Field, A. M. (1988). *The Origins of the Platonic Academy of Florence*. Princeton, NJ: Princeton University Press.
- Gallagher, D. B. (2006). "Review of *Marsilio Ficino: Platonic Theology Volume 6*," *Aestimatio* 3 : 98-105.
- 伊藤 博明 (2015). 「キルヒヤーとオベリスク」『19世紀学研究』 9 : 39-72.
- Klutstein, I. (1987). *Marsilio Ficino et la Théologie ancienne*. Firenze: Leo S. Olschki editore.
- Moche, I. (2001). "Prisca theologia in Marsilio Ficino and Some Jewish Treatments" In Michael Allen and Valery Rees (Eds.), *Marsilio Ficino: His theology, his philosophy, his legacy* (pp. 137-158), Leiden: Brill.
- Ockenström, L. (2013). "Hermetic Roots of Marsilio Ficino's Anthropocentric Thought," *J@RGONIA* 11(22) : 37-56
- Salaman, C. (2001). "Echoes of Egypt in Hermes and Ficino," In Michael Allen and Valery Rees (Eds.), *Marsilio Ficino: His theology, his philosophy, his legacy* (pp. 115-135), Leiden: Brill.
- Schmitt, C. B. (1966). "Perennial Philosophy: From Agostino Steuco to Leibniz," *Journal of the History of Ideas*, 27: 505-532.
- シヤステル, アンドレ (2002). 『ルネサンス精神の深層』 東京: 筑摩書房
- Unger, B. J. (1995). *Prisca Theologia and Human Nature: A Study of Marsilio Ficino's Ontology of the Soul*. University of Missouri-Columbia Ph.D. Dissertation.

